

保育者を目指す学生の「自覚」について — 教育実習を通して —

長 根 利紀代

1、研究の目的

保育科に入学した学生は、必ずしも全員が保育者を目指している人ばかりではないが、本学の本科は単科ということもあり、保育者を目指す姿勢で入学したものの、当初の思いは時間の経過と共に様々にゆれながらその多くが次第に保育者への意志を固めていく。そして、毎年 90% 以上が保育者への道に進んでおり 13 年度入学生も専攻科進学者などを除く就職希望者の就職率は 100% で、内 99.5% が保育系に勤務することになった。しかし、中には小数ながら他の道を選択したり中途退学をする学生も見受けられる。先行研究から、学生たちは 2 年間の授業や実習を経験していく中で、保育者への強い憧れと就職への不安が交錯する。こうした不安は、専門的知識や保育の実践を通して具体的、現実的問題に直面し自分自身との葛藤を重ねながら拡大し自信を減少させていることが考察されている。こうした学生の現状を重視し、保育者としての能力向上を図るため、その姿を具体的に把握した上で、時期を捉えた学生のニーズを踏まえた授業内容に配慮し学習意欲を引き出すことで授業効果を高めることが必要であると考え。そこで、こうした学生の成長を左右する保育者としての「自覚」に注目し、13 年度入学生の 2 年間の追い、本研究で考察することによって、学生の姿や保育者としての成長を把握しさらに学生理解を深めることで今後における学生指導の充実につなげたい。

2、研究方法と内容

13 年度入学生の 1 年次前期・後期、2 年次前期・後期など教育実習期間を意識しながら 2 年間で 4 回のアンケートを実施し、特に保育者としての「自信」を中心に回答を整理すると共に、1・2 年次教育実習の実習園評価を用いてアンケート結果との比較も試みることで考察する。教育実習履修

者は、1 年次 196 名、2 年次 189 名。アンケート期間と有効枚数は、1 年前期 (2001.7.) 190 枚、1 年後期 (2001.11.) 175 枚、2 年前期 (2002.6.) 173 枚、2 年後期 (2003.1.) 185 枚。実習期間は、1 年次は 13 年 6～7 月絵本の読み聞かせ実践半日、11 月教育実習 2 週間、2 年次は 14 年 6 月教育実習・7 月保育実習各 2 週間、施設実習 1 週間である。また、質問内容は「実習への意欲」「実習への不安」「実習に対する自信」「保育者としてやっていく自信」などについてそれぞれ 7 段階評価で 5 (自信がある)、4 (まあまあ自信がある)、3 (何とかやっていける)、2 (あまり自信がもてない)、1 (ほとんどない)、0 (全くない)、分からないとし、その理由を記述するとした。また、実習評価は、1 年次 13 年 11 月、2 年次 14 年 6 月のものであり、学生が実習評価結果を目にするのは、各年度末となる。また、園評価の参考として「評価表」に依頼してある園職員との「人間関係が築けたか」の評価結果も資料とする。

3、結果と考察

1) 教育実習園の実習評価を通して

① 評価全体について

本学学生の実習評価は 1 年次「環境の整備、保育の準備、子どもとのかかわり、記録、実習への意欲、総合」、2 年次では「環境構成、援助、子ども理解、記録、実習への意欲、総合」とそれぞれ 6 項目からなり、いずれも「A 評価」は 80 点以上 (良い)、「B 評価」は 70 点以上 (普通)、「C 評価」は 60 点以上 (普通以下)「D 評価」では 59 点以下で「悪い」という基準を目安として採点を依頼しているが、実習園での評価は、園それぞれの価値観や判断基準が含まれていることは当然考慮されねばならない。そうした点を踏まえながら、実習園に依頼した評価項目の「総合」を取り上げ、1 年次、2 年次の評価を全体的に A・

B・C・D評価別に整理した。実習園は1・2年次とも同じ学生もいれば違う園に配属された学生もいるが、同園でも指導担当者が異なるなども考えられることもあり、それぞれの採点された評価項目「総合」の結果を幼稚園実習における個々の学生の保育者としての評価と受け止めて調査する。成績結果としては、1年次履修者196名のうち21.4%の学生が「A評価」を得、「C評価」は8.7%となっている。また、2年次では、189名のうち「A評価」が23.3%で1年次より1.9ポイント増加、「C評価」は4.2%で4.5ポイント2年次で減少している。B評価は1・2年次とも最も多くそれぞれ69.4%、72.5%といずれも評価の大半を占め、2年次は1年次より3.1ポイント高くなっていることから多少改善傾向にはあるがいずれも大きな変化にはなっていない。

表1 教育実習園評価 (%)

	A評価	B評価	C評価	D評価
1年次	21.4%	69.4%	8.7%	0.5%
2年次	23.3%	72.5%	4.2%	0%

②1・2年次実習評価を総合した結果から

1年次評価と2年次評価がいずれもA評価、すなわちA-Aだった学生、また、1年次Aでも2年次でB評価になったことでA-Bだった学生、同様に、A-C、B-Aなど、評価について1・2年生を通して総合的に調査することとした。その結果、A-Aを獲得したのはわずか7.4%、AからC評価に落ちた学生は0.5%に留まり、CからA評価に伸びた学生は1.6%でC評価に落ちた学生よりは1.1ポイント多くなっている。ここでも、評価B-Bが52.4%と変化の少ない傾向が強い。尚、1年次でD評価を取ると2年次は実習履修できないが、ここで気がかりなのは0.5%ではあるが1・2年次ともC評価に終わった学生である。

表2 教育実習園評価1-2年次 (%)

A-A	A-B	A-C	B-A	B-B
7.4%	13.7%	0.5%	14.3%	52.4%

B-C	C-A	C-B	C-C
3.2%	1.6%	6.4%	0.5%

③教育実習1・2年次における評価「人間関係」について

教育実習は実習評価と学校での学生指導の参考として、実習園職員との「人間関係」が築けたかに対して5段階評価をお願いしている。学生の中には努力しても成績に結びつかなかったり、個性や表現力、マナーなど個人的理由で担当者とのコミュニケーションがスムーズにいかない場合も見受けられる。しかし、職場の特徴として人間関係の持ち方は保育者としては非常に大切であり、現代の人間関係の希薄な学生のマナーや価値観などからみて重要な指導のポイントになると考える。そこで、学生の実習における評価結果から考察する。ここでは、1年次評価「5」で2年次も評価「5」となった学生の評価を「5-5」とし、同様に1年次評価「5」で2年次評価「4」では「5-4」というように整理し考察する。ここで最も数値が高いのは評価「3-4」の20.4%、次に評価「4-4」と「3-3」が同数の17.7%となり、1年次評価「4」あるいは「3」とされた学生は、2年次で実習園が変わっても評価が変わらない傾向が見受けられる。しかし、評価「3-4」と2年次で評価が上がった学生がいる反面、評価「4」から「3」になった「4-3」の学生は14.4%と6ポイント差ではあるが評価の低くなった学生がいる。同様に、「3-5」の5.0%と「5-3」2.8%では2.2ポイント、「2-4」1.6%と「4-2」1.1%で0.5ポイント落ち込みは少ない。評価「5-5」は2.8%程度ではあったが、「4-5」5.5%と「5-4」8.8%を比較すると3.3ポイント、「2-3」の0.6%と「3-2」1.6%で1ポイント2年次で評価が下降したことを示している。そこで、評価全体を総合的に見ると、1・2年次とも評価が変わらなかった学生「5-5・4-4・3-3」は38.2%、1年次より

2 年次のほうが評価の上がった学生「4-5・3-5・3-4・2-4・2-3」は 33.1%、1 年次より 2 年次で評価が下がった学生「5-4・5-3・4-3・4-2・3-2」は 28.7% となったことから、4.4 ポイント 2 年次で評価が高くなってはいるが、この点については今後さらに詳しく研究する必要があると考える。

表 3 教育実習 1・2 年次における評価「人間関係」(%)

5-5	5-1	5-3	5-2	5-1
2.8%	8.8%	2.8%	0%	0%

4-5	4-4	4-3	4-2	4-1
5.5%	17.7%	14.4%	1.1%	0%

3-5	3-4	3-3	3-2	3-1
5.0%	20.4%	17.7%	1.6%	0%

2-5	2-4	2-3	2-2	2-1
0%	1.6%	0.6%	0%	0%

2) 学期ごとにみる学生の保育者としての「自覚」について

ここからはアンケートを中心にして学生の保育者としての「自覚」の変化を「実習への意欲」、「実習に対する自信」を取り上げ、実習に取り組む学生の姿から調査する。ここでも学生自身が自己評価をするが、教育実習は 2 年次前期で終了するため、1 年次前期・後期・2 年次前期の 3 期で実施した。「自己評価」は「5・4・3・2・1・0・分からない」の 7 段階評価とし「5-もっとも自信がある」から「分からない」と評価した。

① 実習に取り組む「意欲」について

「実習への意欲」は、どの学期も非常に高い数値を示しているが 2 年次前期では「5」評価が 69% と 1 番になり、3 期とも意欲的と考えられる評価「5」、「4」を合わせると 1 年前期 92.1%、後期 87.4%、2 年次前期では 93.6% を示している。このように全般的に評価は高く実習に意欲的であることが分かるが、調査結果をさらに明確にするため、評価から「分からない」や評価「3」を抜

いて評価「0・1・2」は自信が「ない」、評価「4・5」を自信が「ある」として結果を評価の「理由」と共に整理した。1 年次前期の「ある」とした学生は、不安ながらも子どもに触れ合える喜びが前面に現れ憧れの「子どもたちの先生」をゆめみている。「ない」とした学生は実習事前の学習を受け止める中で自らの現状を自覚しこれから始まる現実との狭間での不安が強い。また、後期には「ある」は 87.4% で前期に比べ 4.7% 減少したものの、現場に立てたことで理由からは「保育の意味が理解できてきた、自分の課題に気づき課題がもてた」など大枠ながら保育が具体的に見えてきて目標が明確になって意欲が高まったことか分かる。その反面、「ない」とした学生には経験が与えた不安を具体的に「仕事の大変さ、体力的・精神的疲れ」などと訴え消極的で臆病になった面がみられる。しかし、「ある」とした学生は、2 年次では 93.6% と再び上昇し、意欲が「ない」学生は 0% となった。これは、「理由」に見られるとおり「積極的に取り組んだ」実習態度で不安を乗り越え、問題の対処法や解決法を経験して失敗さえも生かそうとする前向きな姿勢が意欲として現れていることから保育者として目指す方向を自覚できたことが期待できる。(図 1・表 4)

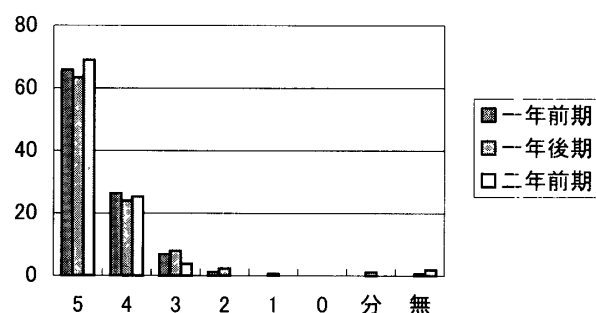


図 1 13 年度生における「実習への意欲」

② 実習に対する「自信のあること」について

ここでも教育実習終了までの 3 期を比較して考察する。7 段階評価でみると、評価「5」では 1 年前期 14.7%、後期 14.9%、2 年前期 20.3% と順調に上昇している。また、評価「4」でも 1 年前期 35.3%、後期 50.3%、2 年前期 62.7% と「自信」の高まりは順調である。しかし、評価「1」「0」が 1 年前期 4.7% が 5.1% に、後期では 0.5% が

表 4 13 年度生における「実習への意欲」

	期間	評 価 (%)		主 な 理 由
実 習 へ の 意 欲	1 年 前 期	ある	92.1	現場の実践から学び吸収したい、学んだことが現場で実践できる、子どもと触れ合える楽しみ、手遊びをして子どもの反応を見たい、自分の将来に繋がる
		ない	1.0	心配や不安、頭の中が混乱、学んできた行動や適切な言葉かけができるか心配
	1 年 後 期	ある	87.4	前回の実習を生かす、保育の意味が理解できてきた、課題に気づき目標がもてた、力を伸ばしたい、日誌の書き方が分かった、仕事の充実感や楽しさが分かった
		ない	2.8	体力的にも精神的にも疲れた、意欲はあるが同時に臆病になってしまう、ピアノ、考えていたより辛く難しい、子どもとの接し方が分からない
	2 年 前 期	ある	93.6	積極的に取り組んだ、多くを学んだ、前向きに取り組む、失敗を生かす、現場でしか学べないものがある
		ない	0	

1.7%と上昇し、いずれも2年次では0%になったものの、「分からない」では1年前期2.1%から、一旦、後期では0%になったが2年前期では0.6%と自信の減少が見られる。また、「実習への意欲」と同様に、「実習に対する自信」が「ある」「ない」として考察すると「ある」と答えた学生は、入学後初の現場における課題実習「絵本の読み聞かせ」後で1年次前期50%、2週間の集中実習後の後期は65.1%、2度目の教育実習後の2年次前期は82.9%と、期間が進むにつれて値が高くなっている。「理由」としては、「紙芝居や絵本の読み聞かせ・手遊び・弾き歌い」など実技によるものが目立つ他、「笑顔・挨拶・体力・掃除」など日常生活で身につけたものも取り上げているが、時期が進むにつれて「子どもの反応の予測」や「子どもを見ると自然に笑顔になる」など保育者としての「自覚」が育っている。ここで、どの時期にも取り上げられている「絵本の読み聞かせ」は、これまで実習事前指導の一環で課題実習として実施し保育活動の実際を集中指導し敵たことで1年前期32.1%、後期34.8%、2年前期でも35.2

%の学生が取り上げ自信に繋がっているのが認められている。また、評価が低く「ない」とした学生は、「得意」がないことや「分からない」ことの不安から自信のもてないことや返って実習で自信を失ったことも見受けられるが、こうした学生の中にも「絵本の読み聞かせ」が取り上げられているのを見るとこうした指導が多くの学生の自信を支えているのが分かる。さらに、「紙芝居、手遊び」など教材活用を学んだことも特に1年前期の学生の自信を支え、日常生活での経験、「泥だんごづくり」など多面的で実際的な理由が取り上げられているのに注目したい。(図2・表5)

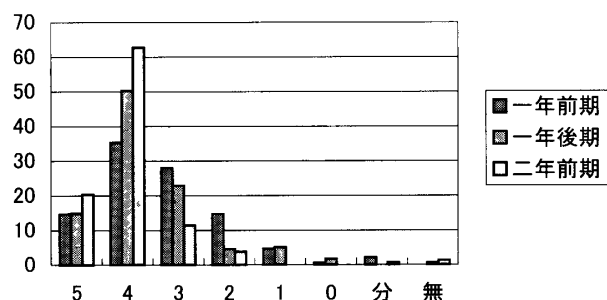


図 2 13 年度生における「実習に対する自信」

表 5 13 年度生における「実習に対する自信」とその理由

	期間	評 価 (%)		主 な 理 由
実 習 に 対 す る 自 信 の あ る こ と	1 年 前 期	ある	50	絵本の読み聞かせ、笑顔で挨拶、掃除、子どもとの遊び、弾き歌い、体力、元気、努力
		ない	20	絵本の読み聞かせ、挨拶、笑顔で話す、うた、性格を生かす、砂だんご作り、子どものことがよく分からない、出来ることが分からない
	1 年 後 期	ある	65.1	紙芝居や絵本の読み聞かせが向上、元気で明るく過ごす、笑顔で挨拶、子どもとの関わりや遊び、弾き歌い、箸の使い方やおいしそうな食べ方、泥だんご作り
		ない	11.4	絵本の読み聞かせは出来る、得意なものがない、未だ分からないことが多い、勉強不足、余裕がない、援助法が分からない、子どもたちにうまく伝わらない、自信のもてるものがない
	2 年 前 期	ある	82.6	紙芝居や絵本の読み聞かせを多く実践、子どもの反応が予測でき余裕がでてきた、手遊び、笑顔
		ない	4.0	子どもがすぐに楽しめる手遊び、子どもたちの様子を見ながら絵本の読み聞かせ、失敗した時のアドバイスを次に生かす

3) 保育者としてやっていく「自信」について

これまで実習に対しての「意欲」や「自信」についてみてきたが、保育者を目指すものとしての「自覚」がどのように「自信」に結びついていくのか調査したい。学生が自分を子どもの教師として自覚し前向きに努力することは保育者として成長するための非常に大きな原動力になると考えられ、一人一人の学生が2年間の学習期間を経て就職試験に取り組み、就職後も途中で挫折することなく生き生き保育者として働いていけるために重要な要素であろう。そこで、2年間に渡る「保育者としてやっていく自信」を学期毎にまとめて考察する。

①保育者としての「自信」について

各学期での「自信」の傾向として、1年前期の学生の自己評価は圧倒的に評価「2」が多く全体の34.2%を占め、論理的な保育の学習が進み中学や高校時代の現場経験では想像できなかった「保育」という職業の重さへの戸惑いから不安が膨らんだものと考えられる。こうした面からこの時期の自己評価は半数以上が自信をもてないのは理解できる。後期になると実習経験も積み、評価は全体的に上昇しており評価「3」が全体の33.1%を占めているし、評価「4」も全体の24.6%となって前期より順調に上昇してきているのが分かる。しかし、2年前期になると評価「5」、評価「3」では評価が減少傾向となったものの、評価「4」が39.2%を示し、評価「2」は12%に減少していることからみて、実習経験から現実的に保育者となる自分を捉えて評価している結果から保育者のあるべき姿を自覚できてきたと言える。2年次後期になると、評価「5」「4」が大きく落ち込み、反面評価「2」が再び42.5%と大きな数値を示すようになった。こうした点を踏まえ、学生全体として学期で比較すると、1年次では前期よりも後期の自信が高く、評価「5」では11.6%から13.1%、評価「4」でも15.3%から24.6%と上昇し、評価「2」では34.2%だったものが後期では18.9%と減少した。これは想像より現実となった保育現場での実習生としての活動から表面的なりにも「保育」が見えてきたことから現れたものと考えられる。2年次前期には、評価「5」では12%と減少傾向だが、評価「4」では39.2%と大幅に上昇し

ており、評価「2」でも12%に減少を示しているのは、実習経験を重ねて評価の中身が実質的になり自分の可能性の「自覚」から実習生として保育への自信がもてるようになってきているのが分かる。しかし、2年次後期で就職がいよいよ現実になる時期では、評価「5」は2.4%2年前期より9.6%、評価「4」では8.4%と前期に比べ30.8%と減少し大幅な落ち込みを見せた。さらに、評価「2」では42.5%と前期に比べ30.5%と高い増加傾向を示し大きく自信が失われている。さらに、評価「1」では2年次前期1.9%から後期2.4%へ、評価「0」では0%から0.6%へ、そして、「分からない」としていた学生は1年前期9.5%、1年後期4%だったものが、2年前期では3.2%へ、2年後期では3.6%に増加しているのが気かりである。こうした結果から、2年間で2年次後期が最も「自信」を失っており、その数値は予測以上の落ち込みをみせている。これは、目前に迫った「担任」としての「クラス運営」を「自覚」しての結果と考えられる。(図3・4)

そこで、こうした結果をさらに明確にするため、ここでも学生の評価から「分からない」や評価

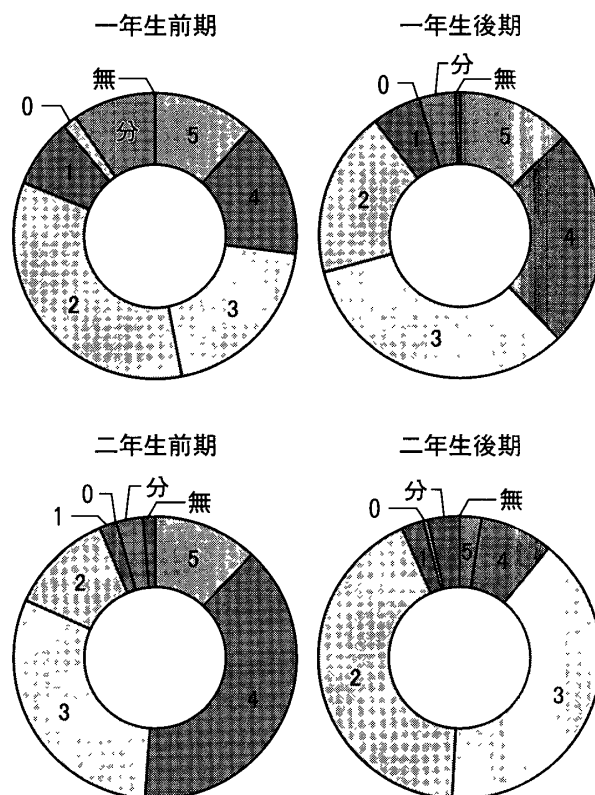


図3 学期毎に見る「保育者としての自信」

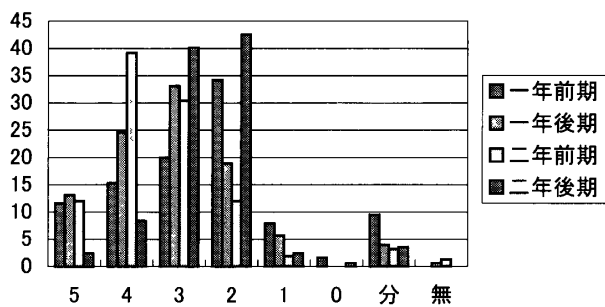


図4 1・2年次通しての「保育者としての自信」

「3」を抜いて評価「0・1・2」は自信が「ない」、評価「4・5」を自信が「ある」として結果を評価の「理由」と共に考察する。「保育者としてやっていく自信」が「ある」と答えた学生は、1年次前期 26.8%、後期 37.7%、2年次 50.8%と決して高いとはいえないが、ここでは保育と保育者の役割の重要性に対する理解の深まりが「理由」の中に認められ実習での経験に大きな影響を受けていると考えられる。また、学習や実習体験が進むにつれて確かな「自信」を育み数値は上昇している。これは保育職へのやりがいや楽しさを見出し、自分自身の成長の必要性、今後の課題への努力につながっており、「不安がやる気に繋がった、失敗を恐れなくなった、子どものために役立ちたい」

など保育者としての自覚が深まり自らの進むべき方向を確認していることから保育者としての資質にも確かな成長が認められる。また、「ない」と答えた学生は、1年次前期 20%、後期 11.4%、2年次 4.0%と順調に減少し、授業で身についた「絵本の読み聞かせ」や「子どもがすぐに楽しめる手遊び」ができるようになったこと、実習時の失敗を生かせるなど自らの力量を自覚した上で前向きな意見を除かせている。しかし、2年次後期になると、「ある」は 9.7%と2年前期に比べ 72.9%と大幅な減少となり、「ない」学生が 28.6%と前期よりも 24.6%もの高い数値を示している。これは1年前期に比較しても 16%上昇したことになる。就職を目前に控えてこのような大きな自信喪失は学生の保育者としての「自覚」にどのような変化があったのであろうか。ここでの評価の「理由」には、「ある」と答えた学生は「実習での自分の成長や仕事の楽しさが分かった、失敗から学んだ、子どもと一緒にいられる」ことなどを上げ、「ない」とした学生は様々な面に不安を抱えており、「保育の大変さ・責任の重さ・失敗の経験・自分の力量・子どもたちに好かれ信頼されるか・教育方針に合わせられるか・部分実習しかしていない・緊張しやすい・性格を誤解された・怪

表6 13年度生における「保育者としての自信」

期間		評価 (%)		主 な 理 由
実習に対する自信のあること	1年前期	ある	26.8	仕事の魅力ややり甲斐、多くを学べた、夢、体力、諦めたくない、自分自身の成長が必要、子どものために勉強をする意欲、
		ない	43.6	分からないことが多い、人間関係が不安、直すところが多い、子どもの家保育の奥深さが分かってきて不安が増えた、仕事がこなしていけるか、自分に合っているか
	1年後期	ある	37.7	実習での経験、やりがい、仕事の内容よく分かり意欲が湧いた、不安がやる気に繋がった、仕事への期待と意欲、今後の課題に向けて努力、仕事に向いている
		ない	24.5	保育の難しさ、無力さ、担任のようになれるか、理想と現実との差、自分を見つめなおす、保育者に値するか
	2年前期	ある	50.8	仕事の難しさ、やりがいや楽しさを実感、子どもに信頼され励まされた、失敗を恐れなくなった、この仕事が夢、子どものために役立ちたい、この職業が合っている
		ない	13.9	実習中の失敗、指導案と実践との差、トラブルへの対応、保護者との接し方、園毎の価値観の違い、実習園での性格的指摘、ピアノや歌、体力、子どもからの期待と自分の実力
	2年後期	ある	9.7	実習で自分の成長が感じられ仕事の楽しさがわかった、絶対保育者になりたい、失敗もしたが多くを学び頑張っていけると思う、保育は難しいが子どもの成長が見られずと一緒にいられる
		ない	28.6	不安、反省がありすぎる、保育者に向いてないといわれた、実習での失敗、担任の難しさが分かった、技術面が苦手、自分に魅力がない、実習で自分の保育者としての良いところを知るチャンスが無かった、良い悪いが判断できない、幼稚園の雰囲気についていけなかった、一人では何も出来なかった、辛かった、得意なものがない、全体を把握できないまま実習が終わってしまった

私の対応・人間関係・余裕が持てない・休みが無く課題も多くやりきれるか・就職先に馴染めるか」など、今までの自分の性格や能力を自覚しながらもそれぞれが理想の保育者像を模索しながら実質的な自分なりの問題を抱えている。(表 6)

3) 実習園評価と学生アンケート結果からの比較

全体的な学生の保育者としての「自覚」について考察してきたが、さらに個々の学生の状況を把握し、一人一人への適切な指導によって学生全体を引き上げる視点が重要と考えることから、ここでは実習園の評価が、1 年次・2 年次とも「A 評価」で終わった学生を取り上げ調査することとした。実習園評価が 1 年次 A で 2 年次も A であったいわゆる「A-A」の学生は 14 名だがその中で資料の揃っている学生 13 名を中心に、評価が「A-C」だった 1 名、「C-A」だった 3 名に「C-C」だった学生 1 名の計 18 名を整理番号①～⑱とした。そして、2 年間の中で一人一人の「保育者としての自信」の変化を中心に実習園の評価と「人間関係」、自己評価から「実習意欲」「実習不安」「実習への自信」、「保育者としての自信に対する自己評価の理由」などにより詳しく調査する。但し、表「6」の折れ線グラフ作成上自己評価の「分からない」は「0」として捉え計上した。「表 6 実習園の評価「A-A」の学生も(整理番号「①～⑱」)は実習園評価は「A-A」、「⑭」は「A-C」、「⑮～⑰」は「C-A」、そして、「⑱」の成績は「C-C」である。園評価は「A-A」で「保育者としての自信」の評価が 1 年次前期が「4・5」で始まり 2 年次後期に「5・4・3」までで終わった学生は「①～⑥」である。彼らは、園での人間関係も良く「③」のみ評価「5」から「4」に下降したが、他は数値が高くなっているか変化無しで終わっている。不安は減少している中で「③と⑤」は不安が大きくなっている。これらの学生はいずれも実習意欲は評価「4・5」、実習への自信も「②」を除いた 4 名は数値が高くなっている。そこで、「保育者となる自信」評価の「理由」をみると 1 年次前期は「保育に関する勉強は楽しい」としながらも、「知らなかったことが多い、頭がパンクしそうになるほど勉強しなければならない」と頑張る姿が見えるが「授業を

受けるほど、勉強すればするほどに保育の奥深さを知った」ことで「私にこんなことができるのか」と現状の自分を自覚し「怖くなった、不安になった」と自信の評価が低い学生がほとんどである。1 年次後期になると実習を通して「いろんな子と触れ合えるうれしさ、自分がやりたいことは子どもたちと関わることだ」と目標を再確認し、「まだまだ勉強不足、子どもの前ではもっと堂々と、行事の指導法に疑問、今後の課題を次回に」と前向きに保育への意欲を燃やし、保育者を目指すものとして「子どもの大切な時期に関わる責任」に気付き、目のあたりにした担任との能力差に心配しながらも保育者への目標をさらに明確にできた。2 年次前期では「子どもがワクワクするような導入」などの指導法や自閉症など気がかりな子どもにも「心を開き仲良くなれたし遊びへの興味を引き出せた」と実践に伴う自分なりの能力の向上を自覚し「失敗を恐れることが少なくなった、辛いことも乗り越えた時得られるものがある」と精神的にも強くなり「素敵な保育者に少しでも近づきたい、自分にもできる」と夢の実現の可能性を実感できた。2 年次後期になると「前よりたくさん事を学び実践できるが前より深いところが見えてきた」と自分の能力を自覚しながら、「クラス全員の子ども、保護者との関わり的重要性」を意識した「担任」としての視点が開かれ、「昔のように子どもが好きなら何でもできるというアバウトな考えができないことに気がついた」、「自分のこともちゃんとできない私」を自覚した上でさらに、「社会の一員としての自分の責任という重み」を実感している。「今後の課題」では、「何があっても自分はだめだと思わない、自分で自分を緊張すると洗脳しない」や自分なりの保育観をもち、「落ちこぼれは出さない、知識を増やす」など子どもや保育に対する高い向上心と前向きに努力する強い意志があることに注目したい。そして、「できることは全力でやる、自分自身を成長させる」と生活態度にもこれまでの態度を自覚し改善していこうとする決意が見える。しかし、「⑥」では 2 年前期の理由の「子どもに助けてもらいながら頑張れると思う」や後期の「外面はいいので人間関係は上手くいく」などと述べており、確かに人間関係は「5-5」で一つの自信につながって

いるようだが「依存的・表面的」面が目立ち多少気がかりな点である。「⑦～⑬」までは園評価は「A-A」で「人間関係」も評価「5」～「4」で非常に良好である。しかし、「保育者になる自信」は非常に低い値からスタートし大きく上下しているのが目立つ。特に、「⑦・⑪」では実習意欲・自信・不安が共に評価「5」で終始している。また特に実習への自信のない学生は「⑧」だが「⑬」と共に徐々に評価を上げてきている。このグループの「理由」には1年生前期「今の時点ではあまりにも無力、まだ知識も少ないし経験もない、保育は大変な仕事と分かり子どもの命を預かるにはまだまだ無理、授業を受けて知らないことや自信のないことが多すぎる、実際に仕事の内容をよく理解していない」と述べ、ここでは授業を受けて知らなかった「今の自分」を自覚している。しかし、「自信のないことが多すぎた、やっぱり保育者に向いていないと落ち込むばかり」と評価「0」でスタートした学生も実習意欲は「5-5-5」である。他の学生もやる気は旺盛で「絶対保育者になりたいから頑張る、頑張って二年間で吸収したい、これから力をつける、実習をしていくうちに自信をつけたい」と決意している。1年生後期になると現場の実体験から「子ども理解ができない段階にいる、子どもがまっすぐすぎて怖い部分もある、担任に自分との力の差を見せつけられた」と不安を膨らませながらも「実際に子どもと接したらどんどん仲良くなれうれしかった、子どもと関わる幸せを感じた、少し手遊びができて自信がもてた、やっていく自信がないのは自分の勉強不足からきていると思う」と実感している。そして、「職業の大変さとやり甲斐を感じた、勉強して力を付けたい、沢山学び実践を通して自信をつけていきたい」とここでも学習意欲に燃え、向上していきたくと子どもを意識して強く感じている。2年生前期になると「言葉のレパトリーを増やして分かりやすく話したい、仕事に魅力を感じた、経験を積んで楽しい保育を展開できるよう頑張りたい」と意志を固めている。しかし、ここでもみられる「自分が先生になっていいのか」は誰もがどの時期にも感じるようだが、「笑顔で過ごす保育には自信があるがどう保育をするのか不安」や「子どもたちの楽しそうな笑顔を見ることができ

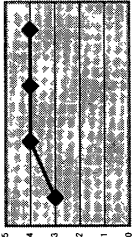
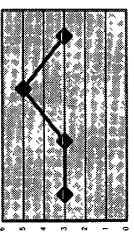
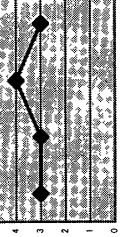
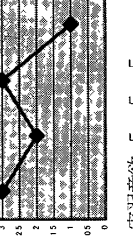
たので子どもたちが先生と呼んでついてきてくれるから」自信がついたと述べていることは気がかりな点である。2年次後期では、「保育者という職業はとても魅力的、自信はないが頑張る意欲はある」に続き、「子どもたちの姿を見るとこの子達のために頑張ろうと光はさすが実践できるかとても不安、子どもを愛していく自信はあるが毎日保育をしていくことを考えると怖い、一人で子どもをまとめることができるか」と不安が強く現れている。さらに、「人間関係が上手くできる性格ではない、自分が自信をもって言えるものが一つもない、毎日の保育を何となくやっていきそうで怖い、言いたいことも言えない自分」を強く自覚し不安が不膨らんでいる。ここでは、それぞれの学生の「得意意識」と「自信」の関係を現しているとして注目したい。しかし、「⑪」の「一人一人を愛することの大切さや実践的なことをこの学校で学んだので何とかやっていけると思う」と述べている言葉は印象的である。今後の課題では、「どの子も全員」を強く意識し、「一人一人がもっている光を見つけ出して援助する」と高度な目標を掲げていることや「ごめんねと言える保育者でありたい」と子どもの姿に学ぶ姿勢もみられる。また、「自分は保育者という自覚を持ち努力を惜しまない、自分の優柔不断な性格を直す、体力をつける、自分を信頼する」など、これまでの自分の生活態度を自覚しあるべき保育者の姿を意識して身につけていこうとする姿勢が見える。園評価「A-C」の「⑭」では、実習成績が下がり「人間関係」も評価「4」から「3」に下がったし意欲は低下して不安も膨らんでいる。しかし、「実習への自信」は横ばいである。1年次では、「勉強不足、無力さを実感したがとてもになりたい気持ちはある」と述べ、2年次でも「まだ自信はないがやりたい気持ちは強いので頑張る」と決意は見せる。しかし、「あまり自信はもてないが頑張る」と気弱になって「保育者としての自信」は評価「2」に留まっている。今後の課題で「自分自身が人に甘えず自立する、好き嫌いをなくすこと」と述べていることから、日常生活の面が問題点となったことが見受けられる。「⑮～⑰」は、園評価は「C-A」と上昇しているにもかかわらず、グラフでの評価値の上下が激しく低い。「人間関係」

は2年次で上昇しているのに実習不安が大きいまま終始している。特に「⑪」では、「実習への自信」が「1-1-4」と低い。1年前期では「不安は一杯だがやる気がある、まだわからないことの方が沢山、今はまだ不安ばかりでわからないことだらけ」と述べる中で、「⑮」は「授業を聞いていると自分にはできないと思ってしまいが読み聞かせで多くの子どもたちと接してすごくうれしかったのですごく保育者をやりたいと思った」と子どもに支えられている傾向が強い。1年後期になると「何を知るにも不安と緊張、子どもが好きと言うだけではやっていけないと思うし実習ではわからないことばかりで不安が一杯、まずは自分自身の体力が必要」と述べながら、「子どもの笑顔でとても励まされた、実習中1度もしゃべってくれなかった子が最後の日に話し掛けてくれたことで保育者としてやっていく気持ちが強くなった」ことで前向きな姿勢は保たれている。2年前期になると、「もっと子どものことを知り関わりたい、担任から言われたことを自分のものにしていきたい」とやる気につなげている。1年後期から2年前期に評価「1」をつけていた学生は「今のところ不安が大きく自信がもてない」と述べているが2年後期で一気に評価が「3」に上昇している。「理由」には「自信はないが何とかやっていきたい自分がある」と意欲を現し、今後の課題にも「何でも人の1倍も2倍も努力する人になる」と決意し取り組みの姿勢が明確である。これと逆に「⑩」のように「就職先のことを考えるだけで暗くなる、何もかもに自信がない、分かっているけどどうしようもない」と抱えきれない不安を抱えている。この不安の中身は、今後の課題にあるように「クラス運営、保護者との対応」が大きいことが分かる。最後の「⑱」は成績が「C-C」となってしまったし「人間関係」の評価は「3」で横ばい、実習意欲はあるがやはり不安が大きい。しかし、「実習への自信」は「4-4-4」と決して悪くない。「理由」は1年次前期では「不安はばかりでわからないことだらけ」、1年次後期は「部分的だったが子どもたちをもっとこうしてあげたいと思った」と分からないながらも手ごたえを感じて保育者への自信が一気に「4」に上昇した。2年次前期でもこの傾向は続き「子どもたちがゲー

ムや言葉遊びなど楽しそうにやってくれたので」これから頑張ろうという気持ちになっている。2年次後期では、やっていけるかすごく不安だが2年間沢山勉強し乗り越え成長したことを振り返り「これからは教えてくれる人は誰もいない」こと、しかし、「責任も重いがやるしかない」と述べ、今後は「いかに子どものことを考え保育していくか、どんなときでも先生、自分自身強くなる」と決意も新たにしている。こうしてみると、学生の保育評価の手がかりがどうしても「子どもが喜んでくれた、子どもが先生と呼んでついてきてくれるから」的な評価が依然目立ち子どもより自分が主役的発想による。ただ、後期「不安な部分もあるがこの学校で学んだので何とかやっていけると思う」は記憶し今後さらに強化できるよう努めながら科学的な視点へと導きたい。また、「一度もしゃべってくれなかった子どもが最後の日に話し掛けてくれてすごくうれしくなって」保育者となる気持ちも強くなり自信が上昇している。この点も「失敗や成功」がたまたまのめぐれや偶然でなく実力として身につけられるよう援助したい。就職先のことを考えるだけで暗くなる」学生の「クラス運営や保護者」への対応を視野に入れた指導も考えたい。「私の中にある自信を信じやっていく中で増やしたい」気持は「今後の課題」でも「自分を信じると」繰り返しているが「自信」は急落し「1」になっており必死に気持ちを支えているのが分かる。また、学生は「途中で自信がついても最後は落ち込む」、「人間関係は非常に高く評価されながら非常に自信を失った」、「最初低い数値で最後は中程度に自信がもてた者は人間関係も評価されている」、さらに、最初は自信について「分からないとしながら園評価や人間関係も高く認められているにもかかわらず自信が持てぬままで終わってしまった」場合や最初は分からないとしながら中間では自信を持ったが園評価は「C」で終わってしまった者などいずれも自分自身の評価と実習での評価が連動していない実態が見えることからさらに指導の改善のため工夫をしたい。尚、この「①～⑱」の学生の実際の就職結果は幼稚園5名、保育園に12名就職することができた。

表 7

自己評価	1年次評価の理由		2年次評価の理由		2年次後期 今後の課題
	前期	後期	前期	後期	
1年前期・後期・2年前期・後期 ① 人間関係 4-4  実習意欲 5-4-5 実習不安 5-2-2 実習自信 4-5-5	自信はあるが色々勉強しなけれ ばならないので日々頭がパ ンクしそうでときには本当に やっていきけるか不安になる	実習に行って少し自信はつい たが実習生といっても先生な のでもっと子どもたちに堂々 と伝えていきけるよう自信をつ けたい	手遊びやパネルシアターの導 入で子どもたちがワクワクし たり想像を膨らませたりする ことがまだ上手くできないの で学ぶ必要がある	クラス全員の子どもを見てあ げられるか保護者と上手くや っていきけるか自信より不安が 多い	子どもたちに落ちこぼれは出 さない、沢山の知識を増やす
② 人間関係 3-5  実習意欲 5-5-5 実習不安 4-4-3 実習自信 4-5-4	近所に子どもと触れ合う機会 も多く保育に関しての勉強は とても好きだし楽しい	今回の実習でいろんな子と触 れ合える雰囲気になれしくな ったが保育者となつて行事へ の指導法に疑問をもった	自閉症やおとなしい子にも心 を開いていくことでとても仲 良くなれたし子ども自ら集団 遊びに興味を示せるようにで きた	何かあっても自分は大めだと 思わず何とかしようとするし 保育が楽しく実習など大変で も辛いというよりそれが気持 ちよかった何が起こるかわ からないので	まず一年間のクラスの担任と して子どもたちを保育してい く、自分でじぶんを緊張する と洗脳しない
③ 人間関係 5-4  実習意欲 5-5-5 実習不安 4-3-4 実習自信 3-4-4	まだ知らない部分が多く深く 知っていくにつれて不安や疑 問が出てくると思うし壁にぶ つかったときに自分への対応 ができるかどうか	実習で自分が今やりたいこと は子どもたちと関わることで 分かりそのためには子ども たちと関わる時間を沢山もち 実習で得た今後の課題を次回 につなげるなど保育者になる ため努力しようと思う	大変で辛いこともあると思う がそれを乗り越えたときに得 られるものがあると思うし先 ずは子どもたちが大好きで沢 山の笑顔に囲まれて仕事をし たいと思う	人間関係の面では今までも上 手く調和をもってやってきた ので不安はないが社会の一員 として自分の責任という重み を感じただ自分のこともちや んとできない私が保育者とし て子どもの前に立っていい ものか	風邪などひかないよう体力を つけ、常にアンテナを張って 子ども心を見抜く、子ども と共に自分も成長していける よう努力を怠らない

<p>④ 人間関係 4-5</p>  <p>実習意欲 5-5-5 実習不安 5-5-4 実習自信 4-4-5</p>	<p>いろんなことを学んでいく中で保育の深さを知り私にこんなことができないか不安になったが奥の深いことだからこそやってみたい</p>	<p>実習を通して人と関わる難しさややすらしさを知り不安にもなるが子どもの大切な時期に関わることができ責任と大切さは私をどんどん夢に向かって前進させてくれているのでますます保育者になりたいと思う</p>	<p>素敵な保育者にはまだ程遠いが少しずつでも近づきたい</p>	<p>前よりは沢山の事を学び実践できるがその分より深いところが見えてきて昔のように子どもが好きなら何でもできというアバウトな考えができないことに気がついた、子どものために自信をもって保育者として子どもの前に立たなくてはいけないので不安</p>	<p>私ができることは全力でやる、自分自身を成長させる</p>
<p>⑤ 人間関係 4-4</p>  <p>実習意欲 4-4-5 実習不安 5-4-5 実習自信 3-4-4</p>	<p>今まで自身はあったつもりだったが授業を受けて怖くなり自信がなくなってしまうそう、毎日子どもを預かるのだから大事に親元へ返せるかなになる</p>	<p>実習で担任を見て本当に寝る暇があるのか不安になるし壁面もとても上手くて自分できるかとても心配だが担任の笑顔を見ることが頑張るために頑張りたい</p>	<p>実習で何でもやってみることが大切と教わり失敗を恐れることが少なくなった、子どもの笑顔をみるために頑張りたい</p>	<p>何とか毎日を過ごしている自分が想像できるから</p>	<p>子どもに悲しい思いは絶対にさせない、信頼される保育者になる</p>
<p>⑥ 人間関係 5-5</p>  <p>実習意欲 5-4-5 実習不安 5-5-1 実習自信 3-3-4</p>	<p>勉強すればするほど自分でやれるか不安になり少し怖くなった</p>	<p>まだまだ勉強不足で子どもたちに上手に何かを教えたり伝えたりすることができない</p>	<p>成功、失敗と本当に色々あったが子どもを前にすると表情が和らぐ自分がいてきつと辛いこともあると思うが子どもに助けてもらいたいながら頑張れると思う</p>	<p>外面はいいので今でも人間関係は上手くいっているから</p>	<p>常に相手に立場になって物事を考える、自分の思いや考えを心に秘めないこと</p>
<p>⑦ 人間関係 5-5</p>  <p>実習意欲 5-5-5 実習不安 5-5-5 実習自信 5-5-5</p>	<p>頑張るぞという意欲と同時に不安も同じくらいあるしまだ保育について学び始めたところだが読み聞かせ実習で子どもたちに直接接してみてもたに魅了されてしまったので2年間で頑張った吸収したい</p>	<p>頑張りたい意欲はすごくありこれから周りの方々にお世話になりながら保育者を目指していくが実習に行くと教師と自分の差を思い知らされるので自信がないが今回の実習で少し手遊びができた時は自信がもてた</p>	<p>笑顔で過ごす保育には自信があるが毎日子どもと過ごしていく中でどう保育をするのか不安</p>	<p>子どもを愛していく自信はあるが毎日保育をしていくことを考えると怖い</p>	<p>どの子ども全員愛すること、どの子ども一人一人もっている光を見つけ出し光らせるよう援助していく</p>

⑧ 人間関係 5-4 	今に時点では自分があまにも無力だと思うから	子どもがどうしたいのかなぜ泣いているのかなど理解できない、子どものまっすぐな意見や友達に対する素直な言葉などまっすぐすぎて怖い部分もあると分かった	まだまだ勉強不足で私なんか子どもの前に立っていいのかもしれない、言葉のレパートリーももっと増やして子どもに分かりやすく話しができたらいいと思う	保育者という職業がとても魅力的なので自信はないがいついけるように頑張る意欲はある	いつも自分の保育を省みて良くなかったところを治す気持ちを持ち続け子どもにがんばれと言え、嬉しさ、悲しさなどいろいろなことを感じることを忘れない
⑨ 人間関係 4-4 	保育の奥深さを痛感したため	今回の実習を通して保育者という職業の大変さを知ったが、とてもやり甲斐のある素敵な仕事だと感じた	実習でこんなかわいい子どもたちと毎日過ごせる仕事に魅力を感じたがそれとは逆に保育していく実力が伴っていないことに気が付き後半と云う学校生活でどれだけ成長できるか不安	保育者としてやっていく自信はないこともないが毎日の保育を何となくやっていたいきそうなのが怖い	自分は保育者であるという自覚を持ち何事に対しても努力を惜しまない姿勢でいること
⑩ 人間関係 4-5 	まだ知識も少ししかない経験もないが子どもや保育の深さが分かってきた	今回の実習を通して私にできるか不安になったが子どもと関わる幸せも感じたので頑張っているいろいろな面を勉強し力をつけたい	色々な実習の中で数々の失敗や反省もあったが、自信があるわけではないが経験を沢山積んで子どもと一緒に過ごせる時間を大切にして楽しい保育を展開できよう頑張りたい	子どもたちの姿を見るとこの子達のために頑張ろうと光はさすが現場で実践できるかどうかも不安、それは自分が〇〇ができるかと自信をもって言える事が一つもないので今自分ってなんだろうと見つめなおしている	自分の優柔不断な性格を直していきたい、柔らかい頭で自分というものをしっかりもつ
⑪ 人間関係 4-5 	今まで色々な事を学んで保育者は本当に大変な仕事だと分かったが子どもの命を預かるには今の私ではまだまだ無理だと思いが絶対保育者になりたいから頑張る	実習に行く前は本当に保育者としてやっていけるか不安だったが今回の実習に行き実際に子どもと接したらどんなに仲良くなる事が出来うれしかったから	少し不安はあるが実習をやる中で子どもたちの楽しそうにやってくれている笑顔を見る事ができ自信がついた	一人で子どもをまとめる事ができるか不安な部分があるが一人一人を愛することの大切さや実践的なこと（手遊びや読み聞かせなど）をこの学校で学んだので何とかやっていると	体力をつける、パネルシアターなどの材料をそろえ実践的なことをもつと身につける

<p>⑫ 人間関係 5-5</p> <p>実習意欲 5-5-5 実習不安 5-1-5 実習自信 3-4-4</p>	<p>授業を受けていてやっぱ保育者になりたいという気持ち は膨らむけれど知らないこと や自信のないことが多すぎて やっぱ私は保育者に向いて いないんだと落ち込むばかり だ</p>	<p>実習園の先生を見ていてすご く子どものことを考えて行司 や言葉かけをしていてすご く自分との力の差を見せつけら れて私もあのようになれるか すごく不安になった</p>	<p>子どもたちと遊んだり保育を する中で子どもたちが「先生」 と呼んでついてきてくれるか ら保育者になる自信が出てき た</p>	<p>自分がまだ自信がもてないの にこのまま子どもたちの前に 立つて保育ができるのか不安 だし保育した子どもたちの将 来が決まるのが怖い、人間関 係が上手くできる性格ではな いので先生たちとの人間関係 が不安</p>	<p>感情を表に出さない性格にす る、ユーモアのある感性を身 につけたい</p>
<p>⑬ 人間関係 5-4</p> <p>実習意欲 4-4-5 実習不安 4-5-4 実習自信 2-3-4</p>	<p>今はまだ読み聞かせの実践し かやっていないし実際に仕事内 容をよく理解していないので 自信はないが実習をしていく うちに自信をつけていきたい</p>	<p>実習の中で半日実習を経験し 今のままでは自信はないがな りたい気持ちは大きくなつ た、やっていく自信は自分の 勉強不足からきていると思う のでもっと沢山学び実践を通 して自信をつけていきたい</p>	<p>園での事を思うとこういう場 面で仕事をしたいと強く思うが 逆に子どもたちの事を思うと 自分が先生になっていいのか と不安に思ってしまうときが ある</p>	<p>本当に自分が保育者になつて いいのか、自分がまだ子ども なのに大丈夫か、言いたいこ とも言えないしという不安で 一杯</p>	<p>子どもを第一に考え心から愛 する自分を信頼し自信をもつ</p>
<p>⑭ 人間関係 4-3</p> <p>実習意欲 5-5-4 実習不安 5-3-4 実習自信 3-4-4</p>	<p>まだまだ勉強不足だと思いか らこれから力を付けていき たい</p>	<p>実習をして自分の力の無さを 実感したがとてもなりたい気 持ちはある</p>	<p>まだまだ自信がないがやりた いという気持ちは強いので頑張 れると思っている</p>	<p>あまり自信はもてないが頑張 りたい</p>	<p>自分自身が人に甘えず自立す る、好き嫌いをなくすること</p>
<p>⑮ 人間関係 3-4</p> <p>実習意欲 4-5-5 実習不安 5-4-5 実習自信 3-3-3</p>	<p>不安なことは一杯あるがやる 気がある</p>	<p>今回の実習で色んな子と関わ ることができたが実習中一度 もしやべってくれなかった男 の子が最後の日に話しかけて くれてすごうれしくなった ことで私はもって保育者とし てやっていく気持ちが強くな った</p>	<p>実習をしてきてもっと子ども のことを知り関わりたいと思 ったから</p>	<p>今の自分に自信がないが全く ないわけではなく私の中にある 少しの自信を信じてやる、や っていく中でその自信をどん どん増やしたい</p>	<p>自分を信じる、自信</p>

⑮ 人間関係 3-5	<p>実習意欲 4-5-4 実習不安 5-5-4 実習自信 5-5-4</p>	授業を聞いていると自分にはできないかと思ってしまうが読み聞かせをさせてもらったとき多くの子どもたちと接しやすさぐうれしかったので保育者をやりたかった	何を知るにも不安と緊張でも先生方のような援助が来ないのでこれからまた授業や実習で学んでいきたい	この実習で先生から言われたことを自分のものとしていき子どもたちと接していきたい	就職先のことを考えるだけで不安で暗くなるには何もかもに対して自分に自信がないからだということは分かっているがどうしようもない	クラス運営の仕方、保護者との接し方
⑯ 人間関係 3-5	<p>実習意欲 3-2-4 実習不安 5-5-5- 実習自信 1-1-4</p>	まだまだ分からないことの方が沢山あり不安が大きい	まずは自分自身の体力が必要だということと子どもが好きというだけでは保育者としてやっていけないと思うし実習では分からないことばかりで不安が一杯で毎日が慌しく過ぎていったが子どもの笑顔でとても励まされた	今のところは不安が大きく自信がもてない	自信はないけど何とかやっていきたい自分がいる、頑張りたい	なんでも人の一倍も二倍も努力する人になる、こう見えても結構もろいので精神的肉体的に強くなる
⑰ 人間関係 3-3	<p>実習意欲 5-5-4 実習不安 5-5-4 実習自信 4-4-4</p>	今はまだ不安ばかりで分からないことだらけだから	分からないことは沢山あったが実習を通して部分的ではあったが子どもたちをもっとこうしてあげたいと思うことができたから	実習へ行き子どもたちがゲームや言葉遊びなど楽しそうにやってくれたのでこれからがんばろうという気持ちになった	本当に私がやっていけるかすごく不安だがこの柳城で2年間沢山勉強して乗り越え成長できた部分も沢山ある、本当に不安は大きいし実習では教えてくれる人がいたがこれからは誰もいないし自分だけに責任がのしかかってくる、そんな責任を本当にとれるか不安だがやるしかないと思う	いかに子どものことを考え保育していくか、どんなときでも先生でいなくちゃいけないから自分自身強くなること

4、まとめ

以上の点から、学生は学習と経験を基に保育者として自覚を明確にしながら不安を乗り越え自信を育んでいる。その「理由」をみると全体的に心情的な面が目立ち、学生の「意欲」は達成感により高められている傾向があり、自己評価は、性格的なもの、自分の好みや得意意識の自己満足に偏らず、「絵本の読み聞かせ」の学習で積み重ねたように、理論に則った評価の目を養い保育者としての力量と実践力向上への手ごたえをもつことが大切である。こうした点から、当初は、課題実習など体験学習により「自信」を支え、実習に対して積極的姿勢で実践力を蓄えられるよう指導し、保育者が身につけるべき「自信」を高めていけるよう配慮することも必要であると考察された。入学した当初は、中学や高校時代の現場経験では思いもよらなかった「保育」という職業の重さに戸惑い不安が膨らんだものとするがこれは保育者のあるべき姿が認識でき始めたことで「今」と「これまで」の自分を「自覚」しこれからの自分の「進むべき方向」を「自覚」するようになってきたことを示している。こうした面からこの時期の自己評価は半数以上が自信をもてないのは理解できるが、筆者の反省として1年前期の授業では、さらに、学生に夢を与える課題やテーマの必要性を感じるので今後工夫したい。就職については、教育実習履修者における2年次後期のアンケートの段階では90.8%が就職を希望しており、その内97%が保育系への就職を希望していたが、実際には就職希望者のうち99.5%が保育系に就職した。しかし、途中でやめてしまう学生もいることを記憶したい。今後、保護者との関わり方や問題点も課題としたい。保育者になりたいと入学した学生は頑張れる率が高いがそれほど強い意志をもたないまま入学した学生には実体験や子どもとの関わりの喜びを実感することで保育者となる喜

びを味わう。それが学習意欲も旺盛とさせ、その結果、評価も上がり自信も増すことになる。さらに、その自信が自分の実力を十分発揮させることになるのである。

本研究で考察できたように、2年間の学生の保育者としての成長にとって、不安のみが膨らんで実力が発揮出来ないことにならないよう、失敗も恐れぬ考え方が身につけられるなど理論だけで説得できない面を実質を伴った指導で具体的に実感できるように実習での経験の分析を冷静な判断の基におこない、自己評価や保育理解を深められるよう指導の方法をさらに研究したい。

【注】

- (1) 長根利紀代 「保育科学生の保育能力について－学生の保育に関わる「自信」を通して－」
「日本保育学会」 第56回大会 2003年
p101～p115

【参考文献】

- 1 長根利紀代 「実習における評価と実習効果についての一考察－実習に取り組む学生の心情を通して」 「名古屋柳城短期大学研究紀要」 第20号 1998年 p163～180
- 2 長根利紀代 教育実習に関する一考察－課題実習「絵本の読み聞かせ」を通して「日本保育学会」第52回大会論文集 1999年 p376～p377
- 3 長根利紀代 教育実習開始時における学生の不安について「日本保育学会」第51回大会 1998年 p430～p431
- 4 長根利紀代 「保育科学生の学習効果と意欲－教育実習事前指導における課題実習を通して」 「名古屋柳城短期大学研究紀要」 第24号 2002年 p101～115

A Study of the Student's Self Consciousness of Becoming Teachers

— By Having Seen Them Teaching Practices for 2 Years since 2001 —

Nagane, Rikiyo*

保育者を目指す学生は、2年間の学習を通して次第にあるべき保育者の姿を把握し自らに置き換えることで自分のやるべき課題を「自覚」していく。それは、実習を重ねてさらに具体的になり、やがて就職を控え担任となる自分の姿を実感するようになると厳しい目で自己評価もできるようになってくる。2年間の中で学生が出会う様々な「自覚」が学生の資質を左右することになると考えることから、こうした時間の流れの中に芽生える学生の保育者としての「自覚」を取り上げ、教育実習を中心に13年度生の2年間に渡る実習への意欲、不安、自信、そして、保育者としての自信、さらに、実習園からの実習評価について調査することで学生の成長を考察した。学生は、実習園評価に関わらず、子どもたちを見つめて励まされながら保育者としての「自覚」を育てている面が強い。しかし、そこで「自覚」した自信では不安定となり保育者の力量となりにくい。また、学期毎に見る学生の不安が本来の実力を実習で発揮できない面も多く、保育者としての「自信」をさらに引き上げる評価基準としての「自覚」を育てる指導方法が考察できた。

キーワード：教育実習，実習園評価，学生の自己評価，自覚，自信